出雲市内神社調査

建造物研究室では2016年度に出雲市からの受託で、すでに調査の終了している出雲大社を除く市内の神社に残る社殿の悉皆的な調査をおこなっています。これまで約190件の神社の現地調査をおこないました。今回の悉皆調査で、外観からの調査により古いもので17世紀後期、それ以降近代までの社殿が確認されました。

出雲大社の膝元で、大社造から派生したと考えられる切妻造妻入の本殿が多くみられましたが、大社の本殿等に代表される2間四方、田の字平面の本体前面に偏って階隠（階段の屋根）の付く純粋な大社造は、ほとんどみられませんでした。屋根が斜めにかかる階隠の多くは本体の正面中央に取り付き、正面扉口は中央にあって内部は1室と考えられます。また、大社にはない組物を用いる社殿も意外に多く、18世紀前期とみられる遺構にも導入されています。大社の寛文年間造営の摂社・末社の中には、田の字平面でない中央に扉口をもつものがあり、大社本殿の寛文年間の計画図には組物を用いた本殿が描かれていることから、大社造からの派生変化は17世紀後期以前に色々なパターンが登場していたことがうかがわれます。

大社造以外では流造も相当数あり、前方縁は庇柱まで張ってその前方に階段を置き、現況では庇側面を柱間装置で仕切っているので、前室付流造に近い形態となります。縁を四方にめぐらせ、前方縁を広く取るのは大社造の派生形式に影響を受けた、他地方にはない特徴と考えられます。

今後は各類型にかかる代表的と考えられる遺構の詳細調査をおこなう予定です。

（文化遺産部　林 良彦）

大宮神社本殿